

# 中世末期日本語の～テアルの条件表現

## —— ～テアレバは状態表現として解釈できるか ——

福嶋健伸\*

キーワード：条件表現、状態表現、～テアレバ、～テアラバ、進行態

### 要 旨

本稿は、中世末期日本語の～テアルの条件表現である、～テアラバと～テアレバを考察対象とし、主に～テアレバに重点をおいて議論を進め、以下の2点を指摘する。

- ①～テアラバは仮定条件を表し、～テアレバは確定条件を表すという使い分けがはっきりとしている。特に～テアレバの例に関していえば、多くの例が偶然確定条件を表しているとして解釈できる。この～テアレバの傾向は、一般的な動詞の「已然形+バ」と異なるものであり、両者を分けて考える必要がある（少なくともまとめて扱うには議論が必要である）。
- ②中世末期日本語の～テアレバには、状態表現（進行態や已然態）として解釈できない例がある。

本稿の②の指摘は、当時の～テアレバを解釈する際には無条件に状態表現として解釈するわけにはいかない、ということを意味している。その結果、当時の～テアルにおいて、具体的な動きのある進行態を表している確例は、発話に関係する例に限定されるようになることも併せて述べる。

### 0. はじめに

本稿では、中世末期日本語の～テアルの条件表現である、～テアレバと～テアラバについて考察する（主に～テアレバに重点を置いている）。

---

\* e-mail address: tafukusi@ybb.ne.jp

従来の研究には、状態表現<sup>\*1</sup>史の観点から当時の～テアルを分析したものはある。

また、条件表現史の観点から、当時の「未然形+バ」「已然形+バ」「～タラバ」「～タレバ」等を分析したものもある。しかし、これら2つの観点を組み合わせた「当時の～テアルの条件表現がどのようなものであったのか」という問題に関する詳しい研究は管見の限りない。

この問題を検討することは、状態表現史を考える上でも、条件表現史を考える上でも有用であるといえる。そこで、本稿では、～テアルの順接条件を表す形式である「～テアラバ」と「～テアレバ」に着目して考察を行う。

本稿の構成は次の通りである。まず、1節では、先行研究のまとめを行い、中世末期日本語の～テアルの条件表現を議論する上で前提となる情報を整理する。次に、2節で調査の概要を述べ、3節と4節で調査結果をまとめる。最後に、5節で、本稿の結論とそれが意味するところを述べる。

## 1. 先行研究のまとめ

本節では、本稿の立場から先行研究の成果を簡単にまとめ、当時の～テアルの条件表現を検討するための前提的な情報を整理したい。1.1節で当時の～テアルについて分析した研究をまとめ、1.2節で当時の条件表現について概観する。

### 1.1. 中世末期日本語の～テアルに関する先行研究

中世末期日本語の～テアルに関しては、湯澤 1929、坪井 1976、柳田 1991 等の優れた研究があり、概ね次のことを明らかにしている。

(1) 上接する動詞：～テアルは、自動詞にも他動詞にも接続する。つまり、当時の～テアルの状況は現代日本語とは異なり、「出である」のような自動詞に接続する～テアルの例も存在する。

(2) 主格名詞：～テアルの主格名詞は、有情物でも非情物でもよい。

---

\*1 状態表現とは、～テイルや～テアル等の表現のことである（これらの形式を「状態化形式」と呼ぶ先行研究もある）。なお、本稿では「状態」という用語を、「状態表現／状態化形式」という場合の「状態」と同様の意味で用いている。

(3)形式と意味との対応：～テアルは、已然態も進行態も表す。

ただし、(3)については、福嶋 2000・2001・2002a で修正意見が提案されており、当時の～テアルに関していえば、「全ての運動動詞の進行態/已然態を、現代日本語の～テイルのように、自由に表せる」というわけではなく、～テアルの表し得る範囲は、ある程度、限定されていたようである。

また、湯澤 1929、坪井 1976 等は、過去を表す～テアルの存在も指摘している。次のような例である。

(4)[食べた物の名前を忘れてしまった太郎冠者に、大名が質問している]

朝くらて有か

(虎明本・文蔵)

※筆者注：「食らうて」の「う」の脱落と解釈した

以上、当時の～テアルについて簡単な整理を行った。

## 1.2. 中世末期日本語の条件表現に関する研究

条件表現に関する研究にも優れた研究が多いが、その中でも特に中世の条件表現について網羅的に扱っている小林賢次 1996 を参考にして、当時の条件表現について概観したい。

小林賢次 1996 は、順接条件について(5)の枠組みを提示し、(6)のような定義を示している\*2。本稿も(5)と(6)をもとに議論を進めていく。

- |         |            |      |   |         |          |              |
|---------|------------|------|---|---------|----------|--------------|
| (5)     | {          | 順接条件 | { | 仮定条件    | 完了性 ……   | 花咲かば見む。      |
|         |            |      |   |         | 非完了性 ……  | 君行かば我も共に行かむ。 |
|         |            |      |   | 恒常条件 …… | 酒を飲めば酔ふ。 |              |
|         |            |      | { | 確定条件    | 必然確定 ……  | 今日は雨降れば客無し。  |
| 偶然確定 …… | 頼みすれば月傾きぬ。 |      |   |         |          |              |

(6) 完了性仮定条件 …… 未来時において、動作・作用の完了した場合を仮定するもの。

\*2 (5)と(6)は小林賢次 1996 の p.11 からの引用である。当該箇所の例文は、松下 1928 の借用なので本稿でもそれに習った。なお下線の引き方には福嶋が手を加えている。

非完了性仮定条件 …現在の事実に関する仮定や、現在あるいは過去の事実  
に反する仮定（反実仮想）など、完了性以外の一切  
の仮定をさす。

恒常条件 …ある条件が成立する際にはいつでも以下の帰結句の事態が成立  
するという、恒常的・普遍的性格をもったものとして提示す  
るもの。

必然確定条件 …条件句が原因・理由を表し、条件句と帰結句とが必然的な  
因果関係で結びつくもの。

偶然確定条件 …条件句が帰結句の事態の成立する単なるきっかけであつた  
り、帰結句の事態を認識する前提であつたりするもの。

この時期の条件表現について述べると、かつて仮定条件表現の中心的な存在で  
あつた、動詞の「未然形+バ」は、この時期にきて衰退してきている<sup>\*3</sup>。この「未  
然形+バ」の衰退は、「～たらバ」（また「～ならバ」）の発達と無関係ではなく、「狂  
言台本虎明本」においては、294 例の「～たらバ」が使用されており<sup>\*4</sup>、その多く  
が完了性仮定条件を表している。

次に、一般的な動詞の「已然形+バ」に関していえば、以下の指摘がある。

(7) 虎明本における「已然形+バ」の形式は、なお確定条件の用法をもとどめて  
はいるけれども、特に一般の動詞例の場合など、恒常条件あるいは仮定条件  
の表現に用いられるものという性格が、かなり顕著に認められるのである。

（小林賢次 1996、p.176）

小林賢次 1996 の p.175 の表を見る限り、『狂言台本虎明本』中の「已然形+バ」  
全体の用例数の中で、偶然確定条件を表している「已然形+バ」の割合は 41 % だ  
であるが、恒常条件及び仮定条件を表している「已然形+バ」の割合は 51 % であり、  
確かに、「已然形+バ」が、恒常条件あるいは仮定条件の表現に用いられる傾向が

---

\*3 「未然形+バ」の順接仮定条件としての使用率は、『覚一本平家物語』で 36.8 % だが、  
『虎明本』では、11.7 % に下がっている（小林賢次 1996、p.135）。

\*4 「～たらバ（たらは完了の助動詞「タリ」）」の順接仮定条件としての使用率は、『覚  
一本平家物語』で 4.2 % だが、『虎明本』では、18.5 % に上がっている（小林賢次 1996、  
p.135）。

確認できる。

また、大島 1991b には、『醒睡笑』<sup>\*5</sup>と『きのふはけふの物語』<sup>\*6</sup>の調査をもとに、当時の「已然形+バ」について言及している部分がある<sup>\*7</sup>。それによると、「已然形+バ」全体の約4割が、必然確定・恒常・仮定などの条件を表しているようである。

「已然形+バ」は、小林賢次 1996 の調査では恒常条件あるいは仮定条件に用いられる割合が高く、大島 1991b の調査では必然確定条件に用いられる割合が比較的高いなどの傾向の異なりはある。しかし、それらのことを考慮しても、先行研究の成果に関して、本稿の立場から次のことが確認できる。

- (8) 当該資料中において、「已然形+バ」全体の少なくとも約4割、多ければ5割以上が、必然確定条件・恒常条件・仮定条件のいずれかを表している。この事実は、「已然形+バ」が偶然確定条件を表す割合は、多く見積もっても全体の6割程度、少なければ5割以下であることを意味している<sup>\*8</sup>。

これに対し、本稿でみる～テアレバは、そのほとんどが、偶然確定条件を表しており、上記(8)の傾向と異なっているのである。

また、先行研究において、～テアレバは、～テアルの条件表現であるため、「事実上、無条件に状態表現として扱われている」と考えられる場合があることを述べておきたい。先行研究の中では、「～テアレバ」という形式について、「状态的な表現」という言い方をする場合があり、この場合、無条件に「(偶然確定条件ならば) …シテイタコロ」「(必然確定条件ならば) …シテイタノデ」のような状態表現の解釈をすることが前提となっている（つまり無条件に現代日本語の～テイルで解釈されている）。

この問題は、あまり明示的に議論されていないように思われるが、本稿の筆者は、～テアレバの用例の中には、状態表現として解釈できない（つまり「…シテイタ

\*5 大島 1991b は『醒睡笑』の中でも南葵文庫本（いわゆる広本）の調査をしている。なお、『寛永版醒睡笑』（いわゆる略本）の調査をしたものに、山田 1994 がある。

\*6 大島 1991b は『きのふはけふの物語』の中でも整版九行本を調査している。

\*7 大島 1991b の pp.75-83 参照。

\*8 大島 1991a・1991b の「偶必定」の扱いを含め、判断が微妙な例も多いため、「已然形+バ」が偶然確定条件を表している割合を明確に言及できなかった。ただし、(8)の指摘でも本稿の主張は問題なく成立する。

コロ]「…シテイタノデ」のような～テイルの表現として解釈できない)ものがあると考えている。この～テアレバの解釈をめぐる問題も、本稿の考察を通して明らかになる。

以上、本稿の立場から先行研究の成果を簡単にまとめ、当時の～テアルの条件表現を検討するための前提的な情報を整理した。次節では、調査の概要について述べたいと思う。

## 2. 調査の概要

本節では、調査の概要について述べる。冒頭でも述べた通り、本稿が考察対象とする形式は、～テアルの順接条件表現形式である、～テアラバと～テアレバである(～テアルの逆接表現形式に関しては今後の課題としたい)。

次に調査資料について述べる。本稿では、中世末期日本語の資料として、『狂言台本虎明本』(単に虎明本とする場合がある)と『静嘉堂文庫蔵本醒睡笑』(単に醒睡笑とする場合がある)を調査した<sup>\*9</sup>。

なお、『狂言台本虎明本』の風流之本、万集類は調査対象外としている。また、和歌・語り・謡等の例も基本的には調査対象外としている(参考資料として言及する場合はある)。

『狂言台本虎明本』と『静嘉堂文庫蔵本醒睡笑』は、資料としての性格を異にしており、また、それぞれの資料における言語現象の傾向に異なりが見られる場合があることも承知してはいるが、今回の分析の観点(～テアレバの解釈等)から見た場合、『狂言台本虎明本』と『静嘉堂文庫蔵本醒睡笑』をまとめて扱うことに問題はないと判断し、本稿では、上記の資料をまとめて、中世末期日本語の資料として

---

\*9 これらの資料以外にも、『天草版平家物語』『天草版伊曾保物語』『きのふはけふの物語』を調査したが、『天草版平家物語』に～テアレバ1例(他～テアツアレバが2例)を得たのみであった。なお、調査資料の詳細に関しては、本稿末尾の〈資料〉を参照のこと。

扱うことにする<sup>\*10</sup>。

### 3. 調査結果①——～テアラバと～テアレバの使い分け——

調査の結果は次のようになる。

- (9) 「虎明本」：～テアラバ3例、～テアレバ4例  
 「醒睡笑」：～テアラバ1例、～テアレバ13例

まず、「～テアラバと～テアレバの使い分けが、はっきりとしている」ということを確認したい。具体的には、～テアラバは仮定条件を表し、～テアレバは確定条件を表しているといえる。特に～テアレバの例に関していえば、(個々の例で微妙な揺れがあるかもしれないが)多くの例が偶然確定条件を表していると解釈できる。以下では、採集された用例を見ながら、この事実を確認したい。

\*10 「狂言台本虎明本」と「醒睡笑」を中世末期日本語の資料とすることについて、補足をおきたい。

『狂言台本虎明本』の成立は1642年であり、近世初期言語の混入もあるが、『狂言台本虎明本』の文献的性質から考えて、概ね中世末期の言語を反映していると判断できる。小林千草1973や金水1982をはじめ、多くの研究がこの資料を中世末期日本語の資料として扱っており、本稿もそのような立場を参考にしている（小林千草1973では、「中世口語」という用語を用いている）。

『醒睡笑』は、1623年頃の成立といわれ、著者は安楽庵策伝である。安楽庵策伝は、1554年頃の生まれで、少年時代より集めた笑い話をまとめたものが『醒睡笑』である（関山1961、鈴木1986参照）。このような成立事情から、『醒睡笑』も概ね中世末期日本語を反映している資料であると考えられる。

ただし、本稿の見解は、これらの資料に近世初期言語の混入が全くない、ということを手張しているわけではなく、近世初期日本語の資料として扱う立場を否定しているわけではない。

なお、安楽庵策伝の出自（金森長近の弟か否か等）をめぐっては、鈴木1986と関山1961・1987とで見解が分かれているが、本稿が問題とする部分（生年等）の見解は、どの研究も概ね一致しているので、本稿の主張に支障を来すことはないと判断した。

〈～テアラバの例〉

- (10) 「とう三郎参りてあらは、某にひき合て給候へ」 (虎明本・鶏猫)  
[藤三郎はまだ来ておらず、仮定条件を表していると解釈できる。]\*11
- (11) 「はくじやう仕てあらは、御高札のおもてのごとく、くんこうは某が望のごとく仰付られうずるか」 (虎明本・鶏猫)  
[まだ(猫を殺したことを)白状していないので、仮定条件を表していると解釈できる。]
- (12) 「きやうの殿がむなしくなりたと申てあらば、御下有まじひぞ、もつてのいれひなるよし申候へ」 (虎明本・継子)
- (13) 「昼の飯をば棚に置たり、九ッなりてあらば、まいれ」 (醒睡笑・児の噂)

これらの例は、全て仮定条件を表していると思われる\*12。次に～テアレバの例を見ていきたい。

〈～テアレバの例〉

- (14) 「夜前のうりをしんぜてあれは、是ほどあちのよひうりはなひほどに、明日は某が所へ御出あつて、くわうずると仰らるるほどに、」(虎明本・瓜盗人)
- (15) 「筑紫の五百羅漢へ参る時、はりまのいなみ野をとをつてあれは、おほきな牛がふせつておつて、」 (虎明本・法定)
- (16) 「心を付てみ申てあれは、不審なやうすのござあつた程に、」(虎明本・釣狐)

---

\*11 [ ]の中に用例の説明等を述べる。

\*12 (12)の例は、恒常的な要素も含まれていると思われ、この点、微妙である。仮に、(10)～(13)の～テアラバの例が全て仮定条件を表しているとして、敢えて、仮定条件の下位分類について言及すると、完了性仮定条件ということになるだろうか。

- (17) 「西の宮へ参り祈念を申てあれば、是も吉日を以て勤請せよとの御つげにて候、かやうにありがたき事はあるまじく候、」  
（虎明本・夷大黒）
- (18) 「兼平の御さいごは、何とかならせ給ふら（ん<sup>\*13</sup>）」ととふ時ちらと手の内を見てあれば汗に流れ正体なし肝をつおし  
（醒睡笑・廢忘）  
[手の平に、譚い出しの部分を書いて能に臨んでいたが、汗で流れていた]
- (19) 急度件<sup>きって</sup>のうはか方を見てあれば、姥驚き申ける様、  
（醒睡笑・謡）
- (20) 「兎はいくつぞ」と人の間ふてあれば、「年は十三になれと、御器ははしめからのしや」と  
（醒睡笑・兎の噂）  
※「醒睡笑」中、「間ふてあれば」は他に類例が2例あった。
- (21) [刀の売買の時に、二尺五寸か二尺三寸かで争いになった]  
目ききするうへにこそ其ならひはあらんずれとかちの許に行間てあれば、  
「両方なが（ら<sup>\*14</sup>）よくみられた、是は二尺四寸といふ物ぢや」  
（醒睡笑・聞えた批判）
- (22) 商人帰るさに[文を]祖父にわたしてあれば、とち程なる涙をながして手を離さず。商人あはれさに文の様を尋きく  
（醒睡笑・文の品々）
- (23) 饅頭を菓子に出してあれば「これは小豆ばかり入て位高し。我等如き者の給はるは難有」とていただく。  
（醒睡笑・舞）
- (24) [風呂の中で、船酔いしたという人がいる。船に乗っているわけでもないのに船酔いした理由を聞くと]  
「さればよ、只今是へ入られたる大髯の男、此程乗し船の船頭によく似たと思ふてあれば其儘よふた」  
（醒睡笑・髯）

\*13 ( ) の中は、鈴木 1986 を参考にして補った。

\*14 調査資料において、( ) の中は「ち」であったが、鈴木 1986 を参考にして「ら」とした。

- (25) [娘が溺れた時に、占いをする者が娘の居場所を教え、泳ぎの名人が娘を引き上げ、医者が娘を蘇生させた。娘を助けた 3 人のうち、誰が娘の婿になるべきか争っている場面での卜者の台詞]

「我始娘のあり処を云てあればこそ取りあげたれ、聲にならん」

(醒睡笑・謂被謂物の由来)

これらの例からわかるように、～テアラバの例は、一般的な真理ではなく、個別的な事柄について使用されており、全ての例が、小林賢次 1996 の枠組みでいう確定条件を表しているとして解釈できる。さらに確定条件の下位分類について言及すれば、(25)は必然確定条件を表しているとして解釈でき、考え次第では(24)も必然確定条件を表しているといえるが、その他の例は、全て偶然確定条件を表しているといえる。割合としては、(少なくとも) 8.8 割以上が偶然確定条件を表していることになる。

以上の検討により、「～テアラバは仮定条件、～テアレバは確定条件という使い分けがはっきりとしており、特に～テアレバの例に関していえば、多くの例が偶然確定条件を表しているとして解釈できる」ことが確認できたと思われる。

次に、この事実の意味することについて述べたい。1.2 節でも述べたが、一般的な動詞の「已然形+バ」という形式に関して次のことがいえる。

- (26) 当該資料中において、「已然形+バ」全体の少なくとも約 4 割、多ければ 5 割以上が、必然確定条件・恒常条件・仮定条件のいずれかを表している。この事実は、「已然形+バ」が偶然確定条件を表す割合は、多く見積もっても全体の 6 割程度、少なければ 5 割以下であることを意味している。(= (8))

このことを踏まえると、「(仮定条件には～テアラバが使用されており)～テアレバは概ね偶然確定条件を表している」という点から、少なくとも、一般的な動詞の「已然形+バ」と、～テアレバを分けて考える必要があると思われる<sup>\*15</sup>。従来の研究では、この点を特に考慮していない(データ上、まとめて扱っている)場合があるが、本稿の調査結果から考えると、～テアレバを一般的な動詞の「已然形+バ」の一種として扱うには、慎重な議論が必要であるように思われる。

---

\*15 「未然形+バ」と～テアラバの関係については、～テアラバの用例数が少ないこともあるので、今後の課題としたい。

ところで、小林賢次 1996 によれば<sup>\*16</sup>、虎明本の中において、～タレバという形式は、その 9 割近くが偶然確定条件を表している。この点から考えて、～テアレバは、一般的な動詞の「已然形＋バ」よりも～タレバに、解釈上の分布の偏り方が近いといえる。今後は、このような観点からの議論が必要になってくるのではないだろうか（～タレバと～テアレバの関係については、次節でもふれることにする）。本節で述べたことをまとめると次のようになる。

(27) 本節のまとめ

- ①～テアラバは仮定条件を表し、～テアレバは確定条件を表すという使い分けがはっきりとしている。特に～テアレバの例に関していえば、多くの例が偶然確定条件を表していると解釈できる。
- ②一般的な動詞の「已然形＋バ」と、～テアレバを分けて考える必要がある（少なくともまとめて扱うには議論が必要である）。

4. 調査結果②——～テアレバは状態表現として解釈できるか——

本節では、比較的用例数の多かった～テアレバの解釈について、さらに考察を加えたい。既に指摘したように、今回の調査で採集された～テアレバの用例には、偶然確定条件を表していると解釈できる例が多いのであるが、さらにみると、「……シタトコロ」という解釈が最も自然であり、「……シテイタトコロ」というような状態表現の解釈が不自然である例が指摘できる。具体的には次のような例である。

- (28) 「兼平の御さいごは、何とかならせ給ふら（ん）」ととふ時ちらと手の内を  
見てあれば汗に流れ正体なし肝をつぶし (醒睡笑・廃忘)  
 (= (18))

- (29) 急度<sup>うご</sup>件のうはか方を見てあれば、姥驚き申ける様、 (醒睡笑・謡)  
 (= (19))

(28)の例は、「手の平に、諷い出しの部分を書いて能に臨んでいたが、文字が汗に流されてしまっていた」という文脈と、「ちらと」という副詞があることから、「(手

\*16 小林賢次 1996 の p.175 の〈表 1〉を参照した。

の平を) 見ていたところ/見ていれば」等の状態表現(現代日本語の～テアレバで解釈されるような、進行態や已然態を表す表現)として捉えることができず、むしろ「(手の平を) 見たところ/見れば」のような非状態表現として捉えた方が自然である。「急度<sup>キット</sup>\*17」という副詞がある(29)も同様である。これらの例に見られる～テアレバは状態表現として解釈できないので、「状態表現として解釈できない～テアレバの存在」を指摘しなければならないだろう。

加えて、節の付いている部分なのであくまで参考例であるが、類例として次のような例もある(節が付いている部分を「」で示す)。

- (30) 「……うしろより、太郎くわじや太郎くわじやと申ほどに「うしろをきつとみてあれば、もうせんかしらにいただき、……」 (虎明本・栗焼)

また、次の(31)と(32)の例も「(瓜を) 進呈したところ」「(文を) 渡したところ」というような解釈が最も自然であると思われる。

- (31) 「夜前のうりをしんぜてあれば、是ほどあちのよひうりはなひほどに、明日は某が所へ御出あつて、くわうずると仰らるるほどに、」(虎明本・瓜盗人)  
(= (14))

- (32) 商人憐るさに[文を]祖父にわたしてあれば、とち程なる涙をながして手を離さず。商人あはれさに文の様を尋きく (醒睡笑・文の品々)  
(= (22))

用例の中には、状態表現として解釈できる～テアレバもあるだろう。しかし、既に見たように、状態表現として解釈できない～テアレバがあることは事実である。本節での観察を通して、少なくとも次のことが指摘できると思われる。

- (33) 状態表現として解釈できない～テアレバの例が存在する。

---

\*17 参考までに『邦訳 日葡辞書』(土井忠生・森田武・長南実 編訳、岩波書店、1980)の「Qitto キット(急度)」の部分を示す。

・Qitto. キット(急度) 副詞。速やかに。

これで、「～テアレバが非状態的な解釈になる場合もあり得る」ということが明示的になったといえる。～テアレバを解釈する際には、この点に留意する必要があるのではないだろうか。

前節では、～テアレバの例に偶然確定条件が多いことを指摘した。そこでも述べたが、虎明本の中において、～タレバという形式は、主に偶然確定条件を表す形式であり、本稿で見た～テアレバは、（文体の問題などを除けば）この～タレバと同じような解釈になる場合があるといえる。このような解釈上の問題を考察する際には、1.1 節で見たような過去を表している～テアルとの関連や、～テアルと～タリとの関係も射程にいれて考察する必要があると思われるが、詳細な議論は今度の課題としたい。

## 5. 本稿の結論と、それが意味するもの

本稿で指摘したことを、まとめて示すと以下のようになる。

### (34) 本稿のまとめ

- ①～テアラバは仮定条件を表し、～テアレバは確定条件を表すという使い分けがはっきりとしている。特に～テアレバの例に関していえば、多くの例が偶然確定条件を表していると解釈できる。
- ②一般的な動詞の「已然形+バ」と、～テアレバを分けて考える必要がある（少なくともまとめて扱うには議論が必要である）。
- ③状態表現として解釈できない～テアレバの例が存在する。

繰り返しになるが、本稿の結論から次のことがわかる。

- (35) 中世末期日本語の～テアレバを解釈する場合には、無条件に、状態表現として解釈するわけにはいかない。

～テアレバという形式に関しては、「～テアルの条件表現だから、無条件に状態表現である」と考えるわけにはいかないのである。このことが、～テアルという形式を考察する上で、重要な意味をもってくる。そのことを以下に述べる。

まず第 1 に、～テアレバを無条件に状態表現として解釈すると、「前後の文脈か

ら考えると、進行態(あるいは已然態)として解釈するのは不自然なのだが、進行態(あるいは已然態)の確例とせざるを得ない」という、形式に縛られた奇妙な問題が起こってくる。上記(35)の事実をおさえることで、この問題を回避できる。

第2に、福嶋 2000 では、次の(36)を、中世末期日本語の～テアルが、具体的な動きのある進行態<sup>\*18</sup>を表している確例として指摘した。

(36)「筑紫の五百羅漢へ参る時、はりまのいなみ野をとをつてあれは、おほきな牛がふせつておつて、」  
(虎明本・法定)  
(= (15))

福嶋 2000 の調査によれば、当時の～テアルにおいて、具体的な動きのある進行態を表している確例は、発話に関係する例を除けば(36)のみであり、この例は説明が必要な例であった。

しかし、本稿の観察からすれば、この例を無条件に進行態として解釈するわけにはいかないことになる。なぜなら、かなり自然に、「(播磨の印南野を) 通ったところ」という非状態表現としての解釈ができるからである。従って、この例は、具体的な動きのある進行態の確例とはいえなくなる<sup>\*19</sup>。

この(36)の例が確例ではないとなると、「当時の～テアルには、具体的な動きのある進行態を表している確例は、発話に関係する例以外、存在しない」ということになる。本稿の結論は、間接的に、このことを意味することになるのである。

#### 〈参考文献〉(一部字体を改めている部分がある)

- 麻生朝道 1975 「天草本平家物語に於ける接続語」(佐賀大学『研究紀要』7)  
安達隆一 1963 「『天草版伊曾保物語』の条件表現について—その諸相と特徴—」(広島大学『国文学叢』32)  
有田節子 2001 「条件文研究の最近の動向」(大阪樟蔭女子大学『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』9)

---

\*18 福嶋 2000 では、「動的な動作継続」という用語を使用している。

\*19 (36)の例に状態表現としての解釈が全くない、という強すぎる主張をしているわけではない。ここで重要なことは、状態表現の確例とはいえない、ということである。

- 安 平 篤・福嶋健伸 2001「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系—アスペクト形式の分布の偏りについて—」（筑波大学『東西言語文化の類型論』特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度Ⅳ）
- 泉 桂子 1980「中世語の仮定条件表現について」（『ことば』1）
- 岩井良雄 1971『日本語法史 鎌倉時代編』（笠間書院）
- 岩井良雄 1973『日本語法史 室町時代編』（笠間書院）
- 岩井良雄 1974『日本語法史 江戸時代編』（笠間書院）
- 江口正弘 1994『天草版平家物語の語彙と語法』（笠間書院）
- 大島留美子 1990「嘶本に見られる条件表現の様相（上）—仮定条件・偶然条件—」（専修大学『専修国文』47）
- 大島留美子 1991a「嘶本に見られる条件表現の様相（中）—必然条件・偶然・必然不定・恒常条件—」（専修大学『専修国文』48）
- 大島留美子 1991b「嘶本に見られる条件表現の様相（下）—主要な表現形式について—」（専修大学『専修国文』49）
- 小川栄一 1991「延慶本平家物語に見える原因・理由の接続助詞句トキニ」（福井大学『福井大学教育学部紀要・第Ⅰ部 人文科学 国語学・国文学・中国学編』39）
- 奥田靖雄 1978「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」（『教育国語』53、54）
- 小田切良知 1943「明和期江戸語について（1）～（3）—その上方向的傾向の衰退—」（東京大学『國語と國文學』20・8、20・9、20・11）
- 尾上圭介 1982「現代語のテンスとアスペクト」（『日本語学』1・2）
- 尾上圭介 2001『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版）
- 金沢裕之 1993a「明治期大阪語の順接確定表現」（岡山大学『岡山大学言語学論叢』3）
- 金沢裕之 1993b「明治期大阪語の順接確定表現〈補遺〉—五代目笑福亭松鶴の場合—」（岡山大学『岡山大学文学部紀要』20）
- 金沢裕之 1994「明治期大阪語の仮定表現」（東京大学『國語と國文學』71・7）
- 紙谷栄治 1993「大蔵虎明本における仮定表現」（関西大学『国文学』70）
- 川端善明 1956「接続関係と関係接続表現」（京都大学『國語國文』25・11）
- 川端善明 1997『活用の研究Ⅱ』（清文堂出版）
- 木之下正雄 1943「仮定条件法について」（京都大学『國語國文』13・5）
- 木之下正雄 1963「条件節の主格表示について」（鹿児島大学『研究紀要 人文社会科学篇』15）
- 金水 敏 1982「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」（東京大学『國語と國文學』59・12）

- 金水 敏 1993「状態化形式の推移補記」(『国語研究』明治書院)
- 金水 敏 1997「現在の存在を表す「いた」について—国語史資料と方言から—」(『日本語文法・体系と方法』ひつじ書房)
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』(ひつじ書房)
- 小林賢次 1996『日本語条件表現史の研究』(ひつじ書房)
- 小林千草 1973「中世口語における原因・理由を表わす条件句」(『国語学』94)
- 小松光三 1981「接続助詞の本質」(『文学史研究』21)
- 小松光三 1988「接続助詞の意味と用法—「ば」の場合—」(愛媛大学『愛媛国文研究』38)
- 坂口 至 1990「近世上方語における接続助詞ケレドモの発達」(九州大学『語文研究』70)
- 阪倉篤義 1958「条件表現の変遷」(『国語学』33)
- 柴田奈美 2001「正岡子規の句「雪ふるよ障子の穴を見てあれば」の考察」(『解釈』7・8)
- 申 忠均 1994「『捷解新語』の改修—原因・理由表現を中心として—」(九州大学『語文研究』78)
- 鈴木 泰 1992『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』(ひつじ書房)
- 鈴木 泰 1999『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』(ひつじ書房)
- 鈴木 泰 2001「時間的局在性とテンス・アスペクト—古代日本語の事例から—」(『日本語文法』1・1)
- 鈴木棠三(校注) 1986『醒睡笑(上)(下)』(岩波書店)
- 関山和夫 1961『安楽庵策伝』(青蛙房)
- 関山和夫 1987「安楽庵策伝の出自について—岩波文庫『醒睡笑』解説への異見—」(東海学園女子短期大学『東海学園 国語国文』31)
- 高瀬正一 1992「『古今集遠鏡』における「已然形+ば」の訳出について」(愛知教育大学『国語国文学報』50)
- 橘 豊 1987「『接続』研究の現在と問題点」(『日本語学』6・9)
- 坪井美樹 1976「近世のテイルとテアル」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社)
- 手坂几子 1999「虎明本狂言のテアルについて」(國學院大學『国語研究』62)
- 中出 惇 1969「ロドリゲス『日本大文典』における疑問表現と仮定表現—特に推量表現を含む場合—」(愛知大学『文学論叢』37)
- 中島悦子 1990「『浮世床』の条件表現—「ナラバ」と「ナラ」、「タラバ」と「タラ」—」(日本女子大学『会誌』9)
- 中野洋子 1980「接続助詞「けれども」の成立」(成蹊大学『成蹊国文』14)

- 西田絢子 1978 「「けれども」考—その発生から確立まで—」（東京成徳短期大学『紀要』11）
- 野村剛史 1994 「上代語のり・タリについて」（京都大学『國語國文』63・1）
- 蜂谷清人 1977 『狂言台本の国語学的研究』（笠間書院）
- 樋渡 登 1980 「洞門抄物類における假定条件表現をめぐって」（都留文科大学『国文学論考』16）
- 福沢将樹 1997 「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティ—」（『国語学』191）
- 福嶋健伸 2000 「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて—動作継続を表している場合を中心に—」（筑波大学『筑波日本語研究』5）
- 福嶋健伸 2001 「中世末期日本語のウチ（二）節における～テイルと動詞基本形—状態化形式の文法化をめぐって—」（筑波大学『筑波日本語研究』6）
- 福嶋健伸 2002a 「中世末期日本語の～タについて—終止法で状態を表している場合を中心に—」（京都大学『國語國文』71・8）
- 福嶋健伸 2002b 「中世末期日本語の～タにおける主格名詞の制限について—終止法で状態を表している場合を中心に—」（筑波大学『筑波日本語研究』7）
- 藤田あゆみ 1976 「近世語資料としての『唐詩選国字解』—「ている」「である」「ておる」「てござる」の用法をめぐって—」（山梨英和短期大学『紀要』10）
- 益岡隆志(編)1993 『日本語の条件表現』（くろしお出版）
- 松岡洗司 1987 「ロドリゲス『大日本文典』における接続詞考」（上智大学『上智大学国文学科紀要』4）
- 松下大三郎 1928 『改撰標準日本文法』（紀元社。改訂版、1929年、中文館）
- 松村 明 1977 『近代の国語—江戸から現代へ—』（桜楓社）
- 守屋由加利 1983 「『中華若木詩抄』における「テアル」の用法」（東京成徳大学『東京成徳国文』6）
- 安田 章 1977 「助詞(2)」（『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』岩波書店）
- 柳田征司 1987 「近代語「テアル」」（愛媛大学『愛媛国文と教育』19）
- 柳田征司 1991 『室町時代語資料による基本語詞の研究』（武蔵野書院）
- 山内洋一郎 1981 「中世前期語（鎌倉）」（『講座日本語3 現代文法との史的対照』明治書院）
- 山口堯二 1966 「接続助詞「ば」の確定条件法」（京都大学『國語國文』35・6）
- 山口堯二 1972 「確定条件法の成立」（愛媛大学『愛媛国文研究』22）
- 山口堯二 1973 「假定条件法の成立」（愛媛大学『愛媛大学法文学部論集 文学』5）
- 山口堯二 1994 「条件表現の起源」（『日本語学』13・8）
- 山口佳紀 1987 「各活用形の機能」（『国文法講座 二』明治書院）

- 山下和弘 1996 「中世以後のテイルとテアル」(京都大学『國語國文』65・7)
- 山田 潔 1991a 「『玉塵抄』の確定順接表現」(國學院大學『國學院雜誌』92・7)
- 山田 潔 1991b 「『玉塵抄』の仮定順接表現」(國學院大學『國學院雜誌』92・10)
- 山田瑩徹 1994 「『醒睡笑』における接続助詞「バ」について」(日本大学『語文』89)
- 山田瑩徹 1997 「『醒睡笑』における接続助詞「バ」について—確定条件の場合—」(日本大学『研究紀要』53)
- 山田瑩徹 2000 「接続助詞「バ」寸描」(日本大学『語文』107)
- 湯澤幸吉郎 1928 「天草本平家物語の語法」(東京高等師範学校『教育』539)
- 湯澤幸吉郎 1929 『室町時代の言語研究』(大岡山書店)(再版『室町時代言語の研究』1975 風間書院)

### 〈資料〉

[用例等を示す場合、表記を変えている場合がある。]

- 池田廣司・北原保雄 校注『大藏虎明本狂言集の研究』上中下巻、表現社、1972・1973・1983 (略称：虎明本) ○岩淵匡他編『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編』、笠間書院、1982 (略称：醒睡笑)。なお、『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編』の解釈にあたっては、鈴木業三校注『醒睡笑(上)(下)』、岩波文庫、1986 を参考にした。○江口正弘著『天草版平家物語対照本文及び総索引(本文篇)』、明治書院、1989 (略称：天草版平家物語) ○京都大学文学部国語学国文学研究室編『文祿二年耶蘇会板伊曾保物語本文・翻字・解題・索引』、京都大学国文学会、1963 (略称：天草版伊曾保物語) ○『きのふはけふの物語』小高敏郎 校注『江戸笑話集』(日本古典文学大系)、岩波書店、1966

ふくしま たけのぶ／実践女子大学文学部助手  
(2003年9月2日 受理)